

CHIT CHAT RADIO 子育てCHAT ROOM

2021年6月15日 15時14分～15時34分



パパも子育て〜男の育休で夫婦関係と少子化が改善するかも！

—今回も鈴木裕美先生お迎えしております。—こんにちは—

こんにちは、よろしくお願ひします。

—初めてお会いします中桐と申します。よろしくお願ひします。

—今回はですね、中桐さんも興味があるという男性と子育てについて鈴木先生に伺いたいな思っているんです。

—私は子どもがいませんが、一昨年結婚しまして、子どものことも妻とは話し合っているところです。授かりものですねども、近い将来子育てということもあるのかなと思ひますので、大変興味を持っています。

—実際、中桐さんにとっては朗報になると思ひますけれども、つい最近、改正育児・介護休業法が衆議院の本会議で成立いたしましたして、具体的には父親が最大4週間の産休を取れることが目玉です。

—そして、育休に関しても企業側が取る意思があるかどうか、本人に確認することが義務付けられるというところですね。

—今まで国としては男性の育休を取得するようにと促してはいたのですが、取得率は一桁台でした。国の目標としては三割。それでも低いとは思ひますが、その三割に届かないわけですよ。男性が育児参加したいと言ひても、なかなかまとまったお休みを取るのが難しかったり、職場の理解が得られなかったり、本人も仕事を休むことに戸惑ひたりして、なかなか取得率が上がりませんでした。今回は積極的に育休が取れる環境を法律が後押しをしていて、ちょっとは取得率が上がるように思ひます。そもそもどうして男性の産休、育休取得率は低いんでしょうか。

育休は会社の制度ではないですよ。国の制度として、当然の権利として取得して良いんですが、会社が小さいからとか、会社の制度で無理だと思ひているところが大きいと思ひます。また、男が仕事をせずに、そんな子育てするなんてと言ひつよつな、上からのプレッシャーがありますよね。仕事自体も休めなかったり、上手く人に回すのが難ひいところもありますよね。日本の会社だと。

—そうですね。やっぱり出世にも関わってくるのかな。自分のサラリーマンとしてのキャリアを考えたときに、取りつらいなと言っ方もいらっしやるでしょうし、先輩が取っていないから自分も取れないだろうというような考え方もありますよね。

—そうですね。まだロールモデルがないんですよ。それに育休取っても先輩たちがちゃんとキャリアアップしているっていうのを見ていれば安心しますが、まず自分がとってその後どうなるのが全く見えないと不安になると思っんです。

—そうですね。それに、たかだか何週間か手伝った位で何の助けになるのかとか、メリットは何だとか考えてしまいますね。でも、これはすごいメリットがあるんですよ。ご主人が育児を手伝えないからという理由で里帰り出産しますけど、生まれた時にすぐご主人が子育てに関わらないと、子どもを育てる知識やスキルが奥さんの方が先が上がってしまうわけですね。その後子どもを連れて自宅に帰ってきてても、知識とスキルの差が大きいと旦那さんが手伝おうとしても、慣れてないから下手くそすぎてイライラしちゃう。実家のような気の良いサポートもなく、睡眠不足も加わって旦那さんにきつくあたっちゃっんですよね。

—お母さんも、いっぱいいっぱいになっていますもんね。

—その夫婦間のスキルの差がトラブルの原因になってしまっんですよね。二人同時に何もわかんないところから始めると、ちょっとしたことでも話し合いながら、すったもんだしながら子育てを始められます。それがすごく大事なことになって思っんですよね。

—だってオムツを変えるのは初めてですから。赤ちゃんは体がぐにゃぐにゃで、持ち上げてちぎれないだろうとか心配になりますね。触り方や抱っここの仕方からしてわからない。

—お母さんだって、オムツを変えるのは初めてですからね。

—そうなんです。慣れてきたら素早くできるとは思っんですけど、最初はもうごごまで持ち上げたりいいんだろっつこれていけてものかなっつとか思っっちゃって、一つオムツを変えるだけなのにすごく時間がかかるんです。この時点から一緒にパートナーとでやるべきじゃないですかよね。

—そうですね。一緒にスキルが上がっていったら、仕事に戻った後でも一緒に子育てをするこじができますね。

—私は負けず嫌いだから、妻だけオムツ変えるのが上手になっていたら、くやしーと思っます。男は妻より上手にオムツ変えてやる！ってタイプだと思っます。(笑)

「今、「お風呂に入れるのは俺の仕事だから」って言って帰る片桐さんの絵が浮かびました。

「それは、帰る帰る！」(笑)

「八時までに入れなきゃいけないんですよ」って言って。

いいですね！(笑)

「まあ、そこはいろんな業務がありますから、うまくやっていただけたらと思います。でもそれだけ積極的に参加したいって言う男性が増えているのも事実ですよね。」

そうですね。あともう一つ大事なのは、最初の2週間に少しでもやっていたら、子育ての大変さがわかるんですよ。これがすごく大切で、妻が子どもを一人で見て、髪ほさばさ、顔ボロボロになって旦那さんが夜遅くに帰ってくるってあるじゃないですか。そうすると、妻が今日はこんなに大変だったとか訴えたりしますね。すると夫はちょっと疲れてんのに、めんどくさいなんて思ってしまう。それで「今日、子どもと遊んでただけでしょ」「要領悪くないじゃないの」「自分の母親もやっていただけね」とか、そういうことを言ってしまうわけです。そうしたら殺意が沸く。アンケートで産後に夫への愛情がどうなるかを調べたら、産む前までは7割の人は愛情がある。奥さんも旦那さんも7割なんだそうです。それで子どもが生まれると、妻の3割しか愛情を感じなくなるそうです。だから、それはやっぱり殺意ですよ。理解してもらえないっていう。

「世の中のお母さん、みんなやってるよ」とか言いがちなんですよね。励ますつもりで、みんなやってるから、あなたも頑張れってことなんですけど、それ言われると確実に殺意ですね。(笑)

「私も気をつけないといけないなあ。」

「私、ママ友とよく話すんですけども、産後の夫からの言動だったり、手伝い加減だったり、その時のことはずーっと根に持っているんです。」

私は結婚して三十年近いわけなんですけど、夫がうちのついたオムツを絶対に変えなかったこと、覚えてますよ。(笑)だから、最初のたった二週間でも一緒にやってくれたっていう体験があるって、もっその記憶でずっといけちゃうんですよ。その後の何十年かの夫婦関係が、育児中の二週間で決まるみたいなの。

―そういう意味では、今回の法改正では、男性産休が制度的に生まれそうだったというのは大きなポイントになりますよね。産休だけじゃなく男性でも産休がとれるというね。

―でも言いそうだね、頭の固い上司とか「お前は産まないだろう」とかね。

―今時、そんな会社あります？

―今、ラジオを聞いている家の方たちはそんな事はないと思うんですけど、極力そういう言葉を発言しないようにしないとイケないですよ。

―もう、そんな会社はないと信じたいけどなあ。

でも、これは大きい少子化対策ですね。二〇六〇年ぐらいになったらもう人口が八千万人台と大分少なくなつて、社会経済的に国が成り立たなくなる危機が訪れます。子育てしやすい社会にするのは重要です。また、夫が家事育児に参加する時間が長ければ長いほど、二番目の子どもを持つ確率が高いという調査結果もあります。夫の家庭での活躍具合が、少子化対策になるわけですね。

―特に兄弟がいるご家庭の場合は、旦那さんがお休みをとってくれると出産の時すごく助かりますからね。やっぱりそういう制度がちゃんと整わないと、なかなか二人目三人目ってというのは進まないだろうなっていうのは、実感としてはありますね。中桐さんはどうですか？負けず嫌いだから、絶対参加するっていうことですかねども。

―私は本当にやりたいですね。だから、産休を必ず取ろうと思います。勝手にこの公共の電波で、うちの奥さんに何も相談もせずに宣言してます。(笑)

いやいや、ぜひお願いします。大体、出産前は夫婦仲がいいのに、子どもが産まれてから愛情を感じている人が七割から三割に減るっているのは、やっぱり家事育児の負担が全部妻にかかったり、その大変さを分かってもうえないのが原因ですからね。

―でも、多いですよやっぱり。子どもができてから、妻から人間扱いされなくなつたと。(笑)

―子どもが一番になつちゃうんですよ。じゃあ、二番目が夫かって言ったら、二番じゃないんですよ。順位下がってますうってこと。

旦那さんも寂しいですよ。

—自分をかまってもらえる時間がないですね。

なんかいつもイライラしているし、上手く手伝えなかったりとかすると「私やるから、もういいーあっち行ってー!」みたいになってしまう。怒ってるし、もう化粧もせずに朝から晩までムームーみたいの着てるじゃないですか。

—わかります、わかります! (笑)ズドンとしたやつ着るわけなんですよ。

色気のない服と顔と髪型で、それも残念なんだろうなって気もします。

—そういう時に、お互いが思いやりを持って過「せるかっていうことですよね。言っときま
す。女性はホルモンが影響してイライラはするんです。ホルモンのせいなんです。夫のせ
いではないんですね。

—それはね、理解しなきゃって。私もね、子どもがいる、いないに関係なく、やはり……

—どうしたんですか? (笑)

—言葉を慎重に、悩んでいます。(笑)女性を一括りにしない方がいいかな。うちの妻、こう
いうとまたこのラジオを聞いていたら怒られるけど、気分の浮き沈みがあるでしょうっ?

—ありますよ。

—これが自分のせいじゃないんだって分かってても、やっぱり私も人間ですからね。感情が
揺れ動くんですよ。そうするって喧嘩になることが多いですよ。それで子どもがいる
こと、なおなうらいつばいい、いいいになる。

—産後は特に不安定になるし、でも妊娠中もなんです。

—そうですね。

でも話すしかないですよ。コミュニケーションが足りなくなると決裂しちゃったり。

—じゃあ男性は、お父さんはどうしたらいいですか?

話すんですよ。いや、話すんじゃないかって聞くんですよ。まあ。

―先生、それが一番難しい。オムツ替えたり、お風呂入れたり、ミルク作ったりは、僕自信がある。やったことないけどね。でも、妻の話を聞くって言うことに関してはね、本当に自信がない。難しいんです。これ、簡単そうに見えるけれど、大変なんですよ。

―私もよく夫に言われます。「お前の話は要点だけ言えばいいのに朝起きて、そこから始めて、その核心部分にたどり着くまでにだいぶ長いぞ」って。そういう感じですか？前段階も入れて、ここを話したいという女性の気持ち。だから話がちょっと長くなる。

―恭子さんがさっき言ったように、良かれと思って口にしたことが、気持ちとしては寄り添ってるんだけど、誤解を受けてしまう。この言葉を扱う仕事をしておきながらですね。

―って、言われたりするんでしょ？アウンサーなのによって。(笑)

―はい。(笑)それ、よく言われます。言葉遣いおかしいよとか。(笑)

気持ちを理解するとか、気持ちに寄り添うとか難しいですよ。まあ、少なくともですね、自分のことは自分でしてほしいかな。例えば、脱いだものを洗濯場を持っていくとか。ご飯を自分でよそうとか、流しに皿を持っていくとか、自分でやるべきことね。

―それは先生、やっています！

グッドです！(笑)

―やっても、喧嘩になるんですよ。(笑)

―問題はどこなんだろう？(笑)

まあ、自分のことは自分でするのは、最低ラインですよ。

―じゃあ、中桐さんは最低ラインクリアしてますね。

そうですね。後は子育てをどのくらい分担できるか。やっぱり自分の時間を持つっていうことが本当に大事なですよ。子育てしている時は、自分の時間を全部子どものために使っている。最初は赤ちゃんの奴隷みたいな感じですよ。だから、ちょっとでいいから、自分の時間が欲しい。例えば、ゆっくりお風呂に入ることや、ちょっと友達と出かけること。子どもを見るから、ちょっと行っておいでって言ってくねると嬉しい。あとは、できれば

子どもを預けて夫婦での時間を過ごすことがすごく大事かなって思っています。子どもがいないと独身に戻った感じで、いろんな話を穏やかにできたりしますよね。

— やっぱ、お父さんとお母さんが仲良いことは、子どもたちにとって良い影響与えるところも大きいでしょうね。やっぱ、子どもからしたら、お父さんとお母さんが仲悪かったりすると、ちょっと寂しいなって気にもなるし。

そうですね。やっぱ間を取り持たなきゃいけないような気持ちになるんですよね。小々くても。お父さんが機嫌悪かったら、機嫌良くなるように良い子にふるまったり、お母さんの愚痴の聞き役になったり。子どもがそんなふうに気を遣うと、子どもらしい子どもで居られないんですよ。遠慮せずに甘えることができなくなる。甘えることが子どもの心の発達に大事なので、親に気を遣わせない方がいいですね。そうならないためにも夫婦でよく話してほしいですね。できれば仲良く、目の前で喧嘩は辛いと思います。

— でも、子どもが生まれてからは、なかなか夫婦で話をすることが減っちゃうんですよね。今日はこうだったという報告はしても、お互いの話、一人の人間としての話が減っちゃうと思うので、そこは意識してやっていくと良いのかなって思っています。

— そこはやっぱ必要ですか？

必要です。いつもお父さん、お母さんじゃなくて、一人の大人としてこんな発見があったとか、もうちょっと手が離れたらこんなことをしてみたいとか、そういうことで夫婦間の絆ってできていくんじゃないかなって。

— どうしてもね、奥さんの方は授乳したり、最初の方は三時間毎くらい、早かったら一時間くらいで起きちゃうので、ずっと二十四時間体制。どうしても旦那さんが帰ってくる頃って子どもと一緒に寝ちゃったりしてすれ違いになりますよね。そういう時に旦那さんに「ねえねえ起きてよ〜帰ってきたらから、ご飯まだ？」とか言われちゃうと、ダメなんですけどね。

それはもう殺意ですよ。(笑)

— それが子どもがいなくて、例えば付き合いたての、あの甘酸っぱい時期だったら嬉しかったりするでしょ。「帰ってきたんだから起きてよ」っていうのは、可愛いなっていうことになる。でも、そういうふうな関係では無くなってきているから「そ、その中でこういう夫婦関係を築いていかってどうですかよね。ステージが変わってますもんね。それを男性は気付きにくい傾向にあるんじゃないか？」

そうですね。でもそつという時に洗濯物を洗っておいてくれたり、流しに溜めてあるお皿洗ってくれたりとかすると、大分株が上がる気がしますよね。

—そっか。起す前に洗えと。(笑)

—ちよつと関係が変わってしまつと、男性はすごく寂しいつて言う話は聞くんですよ。

—男はいつまでも子どもなんですよね。

—でも、子ども一人産んだばかりで、二人はいらぬい。そんなことないですけど。(笑)

そうになると、パートナーじゃなくなつちやいますよね。家族を世話する人じゃなくて、一緒に家庭を運営するパートナーとしてリスペクトする、大切に思うことが大事ですよね。そうすれば、俺は稼いでいて、お前は家において稼いでいないみたいな考えになりませんよね。

—これよく言われますけど、「ちよつと手伝おうか?」つていう言葉もね、やはり女性をいらつとさせるらしいですね。手伝つて何だよと。一緒にやっていることだろ。なんで私の方が主体なんだよつて。男性も手伝つていう意識じゃなくて、パートナーと一緒にやるんだつていう気持ちをつつと持つておかないといけませんね。

そうですね。

—今日は鈴木先生直々にいろんなお話を聞いたので、中桐さん良い子育てできまうつですね。

—本当にそれはいつになるか分かりませんが、そうですね!

鈴木先生、今日はありがとうございました。

ありがとうございました。

おススメの本

- ① 「ワンオペ育児」藤田結子著 子育て真っ最中の男女を取材し、歴史的・社会的・文化的に解説した一冊。男性に読んでほしいです。
- ② 「つかれない家族」ハラユキ著 世界中の疲れない家族を取材し、漫画にしたもの。家族がうまくいく実用的なアイデア満載でおもしろいです。